



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 13 号 令和6年 7月 3日

発行人 会長 西牧 泰彦

### 入退場門の陣旗

東西しらかわ小学校長会長 西牧 泰彦  
(白河市立白河第一小学校長)

今年度の本校の体育会(運動会)の課題は、昨年度の実施後に作成した「直後プラン」から、「日常の体育科の授業の積み重ねの成果として、入場から退場までを一つの演技種目としての発表になるようにすること」「教育活動の特色である生活団単位による体育会として、今まで以上に応援団を中心とした応援の充実により体育会の楽しさが味わえるようにすること」の二つに絞られていました。これらの課題の背景には、ここ数年間の新型コロナウイルス感染症による様々な制限や変更により、体育会本来のねらいや教育的意義が見失われてしまっているのではないかとという問題意識とアフターコロナにおいて体育会をリニューアルする必要があるという意識がありました。

そこで、これらの課題解決に向けて、まず初めに、体育主任及び体育部が中心となって、新たな会場図を作りました。本部席及び来賓席を中心に、左右対称に緩やかな角度を付けたVの字型に、児童席を配置するようにしました。また、トラックを挟んだ対面側の保護者観覧席の配置を可能な限り、迫り出し型に配置するように改善を図りました。この工夫により、各団の応援合戦を背にした演技種目の発表と会場の一体感が生み出されることが期待できました。次に、入場から退場までの一連の流れをつくる方策として、Vの字に配置した児童席の先端部分に各団の入退場門を新しく設置し、演技種目に応じた入退場の動線を決

めることにしました。そして、新しい入退場門は、合戦をモチーフに、教職員が手作りで製作することになりました。原案は体育部が考案し、管理職が強度等の安全管理面を監修、資材の検討と購入のための予算確保は教務主任と主査が担当し、実際の製作は、放課後の隙間時間を使って、教職員が手分けして行いました。塩ビ管…砂場の砂…モルタル…柵用のアジャスター…鉄筋等の材料を相手に、「あ～して…こ～して…」と、数日間の作業の後、高さのある円筒形の土台の上に、陣旗が取り付けられた入退場門が完成しました。

体育会当日、五月晴れのもと校庭を吹き抜ける爽やかな風を受けてなびく陣旗のもとに、子ども達が参集し、勇壮な和太鼓の音と応援旗に送られ、子ども達は意気揚々と入場し、全力で演技し、そして、会場からの大きな拍手のもと、陣旗に向けて満面の笑みで退場する姿がありました。

今年度も「期待の登校、満足の下校」を学校経営のスローガンに掲げ、「対話と協働」を基盤に、教育活動の充実・改善にあたっていきたいと考えました。さらに、自らを自らによって変革していく「自己更新力」のある学校を目指して、学校経営の充実を図りたいと考えました。一方で、働き方改革は待たなしであり、理想とする学校づくりと現実の狭間で、駆け引きにも似た校長としての押し問答が続く毎日です。時に、負担感や徒労感の仕事を「やりがい」や「働きがい」に変える、魔法のような変換キーはないものかと考えることもあり、学校経営の充実及び教育の質の向上と働き方改革の均衡は、「言うは易く行うは難し」の問題として存在しています。そんな中、体育会という学校行事を創り上げる過程において、学校を次のステップに押し上げていくエネルギーは、学校・教職員の「創意と活力」ではないかという視点を得たように思います。学校経営・運営に対する当事者意識や参画意識の源は、それぞれの「〇〇したい」という思いや願いであり、それらの思いや願いを教育活動のねらいに向けて結集し、協働していくことで活力となり、学校を動かしていくエネルギーになるのではないかと……

話の枕が長くなってしまいました。学校経営にかかる様々な課題について共有し、課題解決の方向性や手立てについて、語り合い、学び合い、次なる一歩を見出せる、東西しらかわ小学校長会でありたいと考えています。

## 3ヶ月を経て感じていること

## リーディングDXスクール事業を通して

東西しらかわ小学校長会副会長 清野 孝  
(白河市立白河第三小学校長)

教頭職で2年間お世話になった白三小に6年ぶりに勤務しています。校長室と2階職員室は階段を登る歩数以上に心理的な距離があることにも、何倍にも増えた人の数にも、何とか慣れてきたところです。様々な課題を抱えている子が少なくありませんが、6年前同様「おはようございます。」と元気な声で登校してくる児童の笑顔に毎朝力もらっています。保護者や地域の皆さんと挨拶を交わす中で、やはり変わらず多くの方が学校へ期待を寄せ、協力してくださっていることにも心から感謝しています。本校教育活動全ての基盤として、かつ積極的な生徒指導の実践の場として日課表に位置付けた「ハッピータイム」や「昼休み35分間」等、よりよい人間関係構築と学級づくりへの取組も継続して実践が積み重ねられ、活気のある児童の姿に成果を見えています。

着任前、特に注目していた「特設」の廃止は、教職員の退勤時刻を劇的に変えました。以前は特設指導を終えてから行っていたことが児童下校後すぐに開始できます。各主任を中心に、学年経営や授業づくり、気になる児童の相談等がなされます。突発的な生徒指導や保護者対応の問題も関係職員で迅速に進めることができます。何より一息入れて雑談をしたり、勤務時間内で教材研究をしたりする時間が格段に増えました。今後さらに教職員の心身のストレス軽減やゆとりを生み出すことにもつながるのではないかと期待できます。

そして次の段階です。これまで一部の児童への特設指導へ充ててきた時間と労力を全ての児童に返し、いかに一人一人に力をつけるのか。特設で得られてきた分も含めて、いかに保護者の信頼を高めていくのか。そして、いかに教職員の働きがいが高まるようにしていくのか。本校の学校経営の重要課題であり責任だと考えています。「同じ目的意識で、全体で決めたことを揃えていこう、取組の質を高めていこう。」と、これからも確認し合いながら、皆で進めてまいります。

いつも新しい気付きと学びがある小学校長会の皆様との情報交換が何よりも貴重な時間です。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

白河市立関辺小学校長 東城 正充

前任の矢吹町立三神小学校での話になります。

令和5年度、文部科学省のリーディングDXスクールの指定を受け、1年間、タブレットを授業や校務の中でどのように効果的に活用するか、実践を行いました。

子どもたちが授業の中でタブレットを活用できるよう、教職員への研修会を実施したり、タブレットドリルを学校だけでなく、家庭学習でも活用したりするなど、タブレットの持ち帰りを含めて様々な取り組みを実施しました。

校務の中では、教職員間のコミュニケーションツールとしてSNS系アプリを使い、データを共有したり、連絡事項を送受信したりしました。

また、学校から保護者への連絡もSNS系アプリを導入し、学校からの連絡事項、学校だより、学年だよりもデジタルで送信しました。保護者の皆様からは、大変好評でした。

そのような取り組みの中で、あるIT関連の会社とのつながりができ、その会社で6年生の1日新入社員体験と教職員の研修会を実現することができました。

6年生の1日新入社員体験では、全国初の「地中熱」エネルギーを取り入れた「Nearly ZEB」オフィスの概要や、社員の方々との名刺交換、社内でのオンライン会議等、最先端の職場での働き方を体験させていただきました。

教職員の研修会では、その会社の地域貢献を前提とした社屋づくり、徹底したペーパーレス化、柔軟な働き方に合わせた社内の作業スペースの工夫等、一般企業ならではの取り組みに触れることができました。

特に、社内でのペーパーレス化は、10年かけて実現したということでした。

今回の研修会を通して、この会社の理念や柔軟かつ効率的な働き方改革の現状を実感することができました。そして、「学校の当たり前」を少しでも改善するためには、これまでと違った視点をもつことも大事なのではないかと感じました。

今後も、ICTを授業や校務の効率化のためにどのように活用していくのか、様々な取り組みを試しながら模索していきたいと思っております。

## 地域と共にある学校

白河市立釜子小学校長 唐橋 浩二

白河第一小学校の教頭として4年間勤務し、校長昇任となり、4月より白河市立釜子小学校に着任いたしました。

同じ白河市ですが、東地区の知識がほとんどないことや初めての校長職であるということなど、どれもが不安要素ばかりで、しばらくは緊張の連続でした。

そんなある日、釜子地区の三役（釜子区長、釜子区顧問、釜子区長代理）の方々がお話があるということで突然来校されました。「何だろう？」という不安の中、校長室で話を伺ったところ、新型コロナウイルス感染症の影響で制限されていた「琴平相撲」を以前のように復活させたい、とのことでした。「琴平相撲」とは、江戸中期から現在まで続いている釜子地区にある琴平神社の奉納相撲で、以前は小学生も多数参加していた伝統行事です。地域の先人達から連綿と受け継がれてきた伝統を次の世代に伝えたいという思いに触れることができました。また、いろいろな機会に出会う方々から釜子地区の伝統やよさ、それらにける思いや願いを聞き、地域の受け継がれてきた伝統を守っていかなければいけないという思いと、子どもたちに自分の住んでいる地域のことをもっと知ってほしいという思いを持つようになりました。

今年度、「東中学校区学校共同連携活動事業」がスタートし、地域コーディネーターが配置されました。また、本校の学校運営協議会には、地元の企業の方々も入っていただいております。さらには、釜子地区に「放課後子ども教室」が立ち上がり、スタートします。このように学校と地域が連携・協働できる体制が徐々に整ってきました。これからは学校を含めて地域全体を学びの場と捉え、その中で子どもたちが多様な体験をしながらいろいろなことを学んでいけるようにしていかなければいけないと考えています。そのために校長としてなにができるのか、絶えずこのことを考えながらできるところから進めていきたいと思いません。

東西しらかわ校長会の先生方の皆様には、今後ともご指導・ご助言をいただきますよう、よろしく願いいたします。

## 諸先輩方からのご助言・ご指導のもとに

西郷村立川谷小学校長 早川 貢

校長として臨んだ4・5月の職員会議では、校長示達事項で次の内容について話しました。①組織に必要なことは「1人の100歩より100人の1歩」 $1 \times 100 \neq 100 \times 1$ 。②指導したと言うけれど、その子が変わらなければ、指導したとは言えない。③いじめは「現に起きている」というレベルまで危機意識を上げて対応する。～報告・連絡・相談の徹底～。これらは、前任校の校長先生の学校経営（言葉）から学んだことです。

始業式や入学式の式辞では、あいさつの大切さについて話しました。「おはよう」は4文字、「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」は5文字です。この4～5文字のあいさつには、友達・先輩・後輩・先生方の心を温かくし、よりよい人間関係を築く力があります。また、あいさつは学校だけでなく、家でも、大人になってからも、とても大切なことです。「川谷小学校は、全校生がしっかりあいさつできる学校です！」と自信をもって言えるよう、自分から心を込めたあいさつに取り組んでほしいと思います。この式辞の内容は前任校の校長先生にご助言をいただきました。

また4月下旬には、27年前にお世話になった校長先生から次のような文面のお葉書をいただきました。「学校生活も無事にスタートし、ホッとされていると思います。全く初めての地域、知る人もいないと思います。積極的に地域に飛び込み地域を知り、人々と仲良しになりましょう。それが学校経営に非常に大切です。必ず協力したり、助けてくれる人がいます。また、やりたいことは欲張らず、二つに絞り、先頭に立って取り組んでください。どんなことでも一つ成し遂げるには時間がかかるからです。ともかく、先生も子どもたちも喜んで登校してくる学校にしてください。」このように諸先輩方に温かく見守られていることに感謝するとともに、いただいたご助言・ご指導のもとに、学校経営に当たりたいと思います。

今年度は、東西しらかわ小学校長会の先輩方からもご助言・ご指導をいただきながら、川谷小学校の多様性と調和を重視した「誰一人取り残さない」教育の推進に努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

## Challenge&amp;Change～あやめのように～

## 温故知新、不易流行

中島村立吉子川小学校長 木戸 美智子

矢吹町立中畑小学校長 金子 秀則

香るあやめに陽がおどる わが学び舎ぞ吉子川

これは本校の校歌の歌い出しです。あやめは本校のシンボルで、校章のデザインにも用いられています。教育目標も「あやめのように清らかで豊かな心をもって…」と始まります。なぜあやめなのか、明確ではありませんが、吉子川という地域があやめの自生地だったことに由来するようです。5月になると校舎や校庭を囲むようにあやめの花が咲き乱れる吉子川小。あやめが凛と立つその清々しい姿は、見るものの心を清らかにし、勇気付ける気がします。ふと気になって花言葉を調べたところ、「よい便り」「朗報」「希望」でした。



さて、1874年(明治7年)8月15日に創立した我が校は、今年度創立150年を迎えます。この長い歴史と伝統は、歴代の校長先生をはじめ諸先生方、PTA、地域の多くの皆様のご尽力によって積み上げられ、今日の素晴らしい学校へと発展してきました。いつの時代にもその主役である子ども達の元気と保護者の皆様の愛情の一つ一つが繋がり、地域とともに校風をつくってきた…。そのアイコンがあやめなのだと思います。

子ども達は、あやめのように清らかで豊かな心をもって社会に奉仕できる人になろうと、自分をより良く変えるために、自己の持つ可能性に全力で挑戦しています。自分の限界を決めずに自分を鍛え、未来を自らの力で拓くことができる凛とした子ども。なれる自分よりなりたい自分を目指すことが出来る勇気ある子ども。その育成に向け、全力で学校を経営したいと思います。それが、あやめの花言葉「希望」の具現化だと考えます。

小規模校だからこそできる、子ども一人一人に寄り添ったきめ細やかなサポートで子ども達105名のChallenge&Changeを全力で応援したいと考えております。



今年度で創立150周年という、素晴らしい歴史と伝統を誇る中畑小学校に着任し、身の引き締まる思いがしました。そんな思いになりながら、最初の職員会議では、「中畑小の新しい教育を、みんなで創っていきましょう」という話をしました。令和6年度の始まりに、私の心には2つの言葉が浮かんでいました。

一つは、「温故知新」。急激な社会の変化に伴い、学校教育にも常に変化が求められますが、中畑小の新しい教育を創るために、創立150周年という機会を活かさない手はありません。各種記念事業を構想したり展開したりする過程においては、学校の沿革をたどりつつ、これまでの教育の成果を学ぶことができます。数多の先輩方の功績に思いを馳せ、そこから得た新たな見解を基に、新しい教育を創造していきたいと考えています。

もう一つは、「不易流行」。礼義、自律心、協調性、正義感、公德心などを子どもたちに培うことは、この150年の間に社会がどんなに変化しようとも、時代を超えて変わらない価値を有する、教育における“不易”です。一方、国際化や情報化などの時代の変化とともに、変えていく必要があるものに柔軟に対応していくことは、教育における“流行”です。学校は、このような“不易”と“流行”を十分見極めながら、子どもたちを教え、育てていく必要があります。

特に重要なのは、なんとといっても日々の授業です。しかし、その見極めは決して簡単ではありません。タブレット端末の活用が“手段”ではなく“目的”となり、本質からほど遠い授業があります。“主体的”“対話的”“協働的”“探究的”などの学びを、近年提唱された新しいものととらえる誤解もあります。タブレット端末を使った授業は、今はまだ“流行”なのでしょうが、それなしの授業はもはや考えられないことから、数十年後には“不易”になっている可能性もあります。

古い頭の校長ですが、新しい感覚の若い先生方と一緒に勉強し、教育の“不易”と“流行”を見極めながら、中畑小の学びの変革を推進していきたいと考えています。

どうぞよろしくお願いいたします。

## 「三神小学校 五心」を地域と共に

## 挑 戦

矢吹町立三神小学校長 菊池 呂之

4月1日に矢吹町立三神小学校に着任し、2カ月が経過した6月上旬に、学校運営協議会 第2回三神小学校区部会を開催しました。

矢吹町はコミュニティスクールを推進しており、各学校に「学校運営協議会」を設置して、4つの提言「1 家庭で勉強する習慣を」「2 健康な身体づくりに努め、元気なあいさつをする習慣を」「3 テレビやゲーム、スマートフォン、パソコンなどの使用はルールを決めて」「4 読書を楽しむ習慣を」からそれぞれの校区の課題を選定して熟議をし、改善に取り組んでおります。三神小学校区部会では、今年度「弱みは改善し、強みはさらに伸ばして」というコンセプトで4つの提言全てに取り組んでおります。

そこで、第2回の部会では「あいさつ」について熟議を行いました。学校では元気なあいさつが向上しているという評価がある一方で、地域ではなかなかあいさつができていない現状が報告されました。また、子どもたちの言動に、やっってもらって当たり前の風潮があり、感謝の気持ちが薄れている感じがするとの話題もありました。そんな熟議の中で、「三神小学校 五心」がキーワードに挙がりました。

- 一 「ハイ」という素直な心
- 二 「ありがとう」という感謝の心
- 三 「ごめんなさい」という反省の心
- 四 「おかげさま」という謙虚な心
- 五 「私がやります」という奉仕の心

学校・保護者・地域が一体となって「三神小学校 五心」を体現できる子どもを育成するために、五つの心を体現するという事は、生きていく上でどのようなよさがあるのかを子どもたちと再確認することを決めました。

素直で明るく、元気な三神小学校の子どもたちは、保護者や地域の方が自分たちを見守ってくれていること、そのおかげで安全・安心に生活できていることを知っています。学校は、「三神小学校 五心」で地域と共に、地域を元気にし未来を担う子どもたちの育成に取り組んでいきます。

末筆ながら、東西しらかわ小学校長会の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

泉崎村立泉崎第二小学校長 笹山 美紀子

「校長先生、おはようございます。」100メートルほど離れているのでしょうか。誰だか分かるか分からないかくらいの場所から、私の姿を見つけると、大きな声であいさつをしてくれる子ども達。そのあいさつに負けないくらい私も大きな声であいさつを返します。泉崎第二小学校に着任して3ヶ月が過ぎようとしている今でも、その姿は変わらず続いています。毎朝、私は、なんとも言えないすがすがしい気持ちと、その日の活力を子ども達からもらっています。

「挑戦 やればできる！」泉崎第二小学校の合い言葉です。今の自分より一歩先の自分を目指し、子ども達はもちろん、先生方も一丸となって取り組んでいます。子ども達、先生方が挑戦するためには、挑戦できる環境が必要です。人は、認められる環境があって初めて生き生きと生活し、挑戦できるものです。そんな学校になっているだろうか。そんな学校にしていこうと学校全体で同じ方向を向いているだろうか。日々、自問自答しながら、改めて、校長としての使命と責任を感じているところです。

先日、自然体験活動で子ども達といっしょに鳥峠に登る機会がありました。地域の方々が、子ども達のために自然観察はもちろん、自然の中でのさまざまな体験を用意してくださいました。それ以外にも、本校には、田んぼの学校や村内史跡巡り等、地域の方々にご協力いただく機会が多くあります。そんな地域の方々の思いに触れる中で、「地域の人との交流から地域のよさを知る」ことができる環境に大変感動しました。学校と地域がいっしょになって子ども達を育てていく素晴らしい環境が、ここ泉崎第二小学校にはあります。

素直な子ども達、子ども達のために一生懸命な先生方、子ども達のためならとすぐに協力してくださる地域の方々のために、私自身も、校長として学校経営をしていく中で、挑戦し続けることを忘れずにさらに努力していく所存です。

今後とも東西しらかわ小学校長会の先生方のご指導、ご鞭撻をいただきながら、本会員として精一杯努力してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 素直な子ども、地域とともに

## 「心を込める」

棚倉町立社川小学校長 目黒 公三

鮫川村立鮫川小学校長 吉田 智

社川小学校に赴任してまだ3か月あまり。校長として何ができるのか、何をすべきなのかに不安を感じながらも、「社川小学校に赴任できてよかった！」と思えることがすでにたくさんありました。ここでは、そのうち特に2つを挙げさせていただきます。

ここ、鮫川小学校は、5年前まで教頭として2年間勤務した学校です。当時子どもたちや同僚の先生方との学校生活、学校行事などを思い出しながら、今は校長の立場で子どもたちや先生方を見えています。

一つ目は初めて社川の子ども達と出会った着任式の日のことです。式の最後に、全校生が校歌を歌ってくれました。驚いたのはその声の大きさです。人数の割に大きな体育館の壁や天井がビリビリと震えるように感じたほどに、子ども達の歌声が響き渡りました。自分の学校の校歌をこれほどまでに堂々と歌う子ども達の姿に、底抜けの素直さと、自分達の学校に対する思いの強さをひしひしと感じました。それまで不安と緊張でいっぱいだった私の心の中に、「自分の学校に誇りをもったこんなに素直な子ども達と一緒にこれからの学校生活を送れるんだ」という大きな期待が湧いた瞬間でした。

校長職に就いてから4年目となります。前任の浅川小学校に着任した際に、自分に「どんな校長になりたいか」「どんな学校経営をしたいか」を問い、色紙にある言葉を書きました。それは「心を込める」という言葉です。学力向上も課題、生徒指導も大切、働き方改革も進めなければならない等々、学校における課題は多いです。その様々な課題を解決していくために大切なことは、「心」だと思っています。先生方にも、子どもたちにも、この『「心を込める」ことを大切にしていきましょう。』と話しています。鮫川小学校の運営委員会の子どもたちは、「心を込めてあいさつをしよう。」というスローガンを掲げてあいさつ運動を展開しています。先生方は、非認知能力を高めようと日々の授業改善を図ってくれています。私自身も、子どもたちや先生方、地域の方がと接するときに、「心を込める」ことを第一に考えて対応しています。

二つ目は地域の方々との存在です。社川小学校は、職員はもちろん保護者の方々でも整備しきれないほど広大な学校林をかかえています。そこで、本校の奉仕作業は地域の方がたくさん参加して下さるのです。奉仕作業の日の草刈り機の数も圧巻です。また、校庭を貸し出しているソフトボールのスポ少の方は、定期的に校庭をならして下さいます。さらに休日には、周辺にお住まいの方が、花壇の花に水をあげて下さいます。その他にも、大きな学校田を貸して下さる方や田植えから稲刈りまで指導して下さる方、その学校田の周りの草を刈って下さる方など、数えだしたらきりがなくたくさんの方々が学校のために力を貸して下さいます。これほど地域に大切にされている学校に赴任できたことは、校長として幸せなんだと実感しています。

始業式で、子どもたちに「心」について話をしました。まずは「心ってどこにある？」と話します。するとみんなは胸に手を当てて「ここ！」と答えます。そこですかさず「実は、ここにありませんよ！」と、頭を押さえて「心はね、自分が考えることで決まるんです。つまり相手の人や物事を一生懸命に考えることなんです。」と教えます。「心は見えますか？」すると子どもは「見えない！」と。「いいえ。はっきりと見えますよ。それは、心が決めて君たちがどう行動するかが、実は心なんですよ。」と諭します。

素直な子ども達、学校を温かく支えて下さる地域の方々、そして明るく前向きな先生方とともに、笑顔あふれる学校になるよう精一杯努力してまいります。東西しらかわ小学校長会の皆様方には、今後ともご指導・ご助言をいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

この原稿を書いている最中に、子どもが校長室を訪れました。私が学校だよりで出している難問を解いて、その解答を提出に。「失礼します。校長先生の問題を解いたので持ってきました。」満面の笑みに心のこもったあいさつ。私も満面の笑顔で答えます。少しずつですが、子どもたちの「心」の成長が見られてうれしい毎日です。